

当院眼科での治療のご紹介



眼科部長
中村 春香

当院では新病棟眼科開設時の1998年から現在まで硝子体手術と白内障手術を継続的に行っております。白内障手術は近年の患者さんからのニーズにより、日帰り、1泊入院も行っておりますが、2泊3日を基本としております。「入院して手術を安心して受けたい」、「術後の連日の通院が大変」というご高齢の方々、ご家族からの根強い需要があります。各科のバックアップのもと、腎不全による維持透析中、糖尿病、心疾患、血液疾患などの持病をお持ちの患者さんがたにも安心して手術が行えます。

2017年度の観血的手術の内訳は硝子体手術36件（硝子体手術単独&硝子体手術＋白内障手術同時施行）、白内障手術164件、その他10件です。緊急を要するもの、さらに高度な処置が必要な症例は群馬大学付属病院眼科と連携して治療させていただいております。網膜光凝固術や後発白内障切開術は外来で通院加療可能です。加齢黄斑変性症などに対する抗血管内皮増殖因子硝子体注射は、通院ですがより清潔な手術室で行っております。

糖尿病網膜症

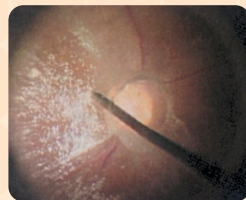
国民病である糖尿病の約35%に糖尿病網膜症があると言われています。そのうちの10%は視力低下の恐れのある病態で、糖尿病網膜症は失明につながる病気でありながら、初期には自覚症状がとぼしく、気づかないうちに進行してしまい、症状が出てから眼科受診されたときには手遅れになっていることのある恐ろしい病気です。当科では糖尿病網膜症に対して一貫してレーザー治療、糖尿病黄斑浮腫に対して抗血管新生療法、増殖性糖尿病網膜症に対する硝子体手術も行える、県内でも数少ない施設です。しかしながら網膜症が軽度か無い状態で糖尿病をコントロールすることが病気の進展阻止にとっても大切です。糖尿病患者さんには症状がなくとも定期的に眼科受診を受けていただきたいと思います。当院内分内分泌科での教育入院で入院された患者さんには、

当科からも糖尿病網膜症の講義スライドで眼科受診の大切さをお話しています。

手術治療

硝子体手術について解説します。硝子体とは、眼球の中にある透明なゼリー状の組織のことで、その奥に網膜というものを見る神経の膜があります。ものを見る中心部を黄斑と呼びます。網膜疾患には硝子体に関与している病気が多くあり、手術の適応になります。当院で施行されている硝子体手術の対象疾患は下記の通りです。

1. 黄斑円孔（黄斑に穴があき中心が見えなくなる）
2. 増殖糖尿病網膜症
3. 糖尿病黄斑症（黄斑の浮腫により見づらくなる）
4. 黄斑前膜（黄斑に膜がはり、ものが歪む）
5. 硝子体出血、硝子体混濁



硝子体の可視化手術

機器の進歩により器具を抜去した後に創口が自然閉鎖し、縫合の必要がない極小切開硝子体手術が施行できるようになりました。術中の眼圧変化や眼球変形が少なく、術後の炎症が低減されます。また術後の異物感も軽減され患者さんにも優しい手術が可能となりました。硝子体手術は3泊4日で行っております。2013年度から新型のマルチスキャンレーザー光凝固装置が導入され、従来のものより痛みが軽減できるようになりました。2014年秋からは新型の白内障手術装置が導入され、2018年夏からは新型の硝子体手術装置が導入されます。

今後も、より安全で患者さんの負担を軽減できる治療を目指していききたいと思います。

医療体制

現在常勤医1名ですが、前橋中央眼科から週一回、群馬大学眼科前教授の岸章治先生（木曜日午前：網膜硝子体外来）と福地真理子先生（水曜日）に来ていただき、その曜日は2診察対応しています。月曜は萩原優子先生に診療分担いただいております。診療体制を保っています。1人常勤でできることは限られていても、当院の専門性を活かして地域医療に貢献していききたいと思います。